

第一部 トーク&メッセージ

□鎌田 實

■スベトラナー・アレクシエービッチ (通訳・竹内高明)



□スベトラナー・アレクシエービッチさんは、ウクライナ共和国に生まれました。ご両親はベラルーシ人です。アレクシエービッチさんは、「戦争は女の顔をしていない」という本を書かれています。子どもや大人の目から戦争を見て書かれたドキュメントです。これは体制批判ということで出版禁止になりました。ところが多くの人が読みたいと言われ、2年後に許可され、今は200万部出版されています。また、旧ソ連がアフガンに侵攻した時の兵士の家族の視点から「アフガン帰還兵の証言」を書いています。体制批判をしづらい国にあって、きちんとしなければならぬ時にしている。彼女はそれが作家としての使命だと言っています。

■日本に来て、1週間経ちました。先ほど少し休みましたので元気です。今日、北海道から戻ってきました。そこには泊原発があつて、チェルノブイリと同じようにとても美しい所がありました。今、原発が在るところは、かつて教会があつたような美しい場所です。

□ドキュメントという方法にこだわるのは、何か理由があるのでしょうか。

■私は職業をジャーナリストとして出ました。たくさんの人に会って話を聞きました。その中で、人々はそれぞれに物語があるのではないかと、それもある有名な人々ではなく、名もなき小さな人々の話は、ドストエフスキーも著し得なかった物語を持っているのではないかと思いました。

□スベトラナーさんは、チェルノブイリから人類は何を学んでいかなければならないと思われませんか。

■私は、事故後初めて原発に入ったとき、人々は呆然としていました。つまり、人々は今までに経験したこともなく、何をどうしていいか解らなかつた。中央のソ連邦政府は科学者を現地に送

り込んだのですが、彼らもどうしていいか解らなかつた。何もないと報告しておけばいいと思っていた。つまり今まで経験したこともなかつた。

原発のプリピャチの人々は原発の火事を見て、それが美しいと思っていた。事故報道についてはだれも理解していなかつた。まったく新しい現実の中にベラルーシという国が投げ込まれた。そういうものが個々に現れていることを書かなければならないと思いました。

旧ソ連邦は核戦争を想定してきましたから、我々はそういうものを準備してきたわけです。我々は、核戦争と原発の平和利用を分けて考えていたわけです。例えば、旧ソ連邦の学者アレクサンドロフは、原発を考えました。サハロフは平和利用を言っていました。

しかし、今日では戦争の利用と平和利用は意味は同じではないかと言えらると思います。

「チェルノブイリの祈り」は10年かかって取材して書いています。彼女は

この本でチェルノブイリのことを語っていない。チェルノブイリ以後変わった世界、21世紀の人類の挑戦について私は書きたかつた、と先ほどお聞きしました。

■日本に来て、1週間経ちました。先ほど少し休みましたので元気です。今日、北海道から戻ってきました。そこには泊原発があつて、チェルノブイリと同じようにとても美しい所がありました。今、原発が在るところは、かつて教会があつたような美しい場所です。

□今、アレクシエービッチさんはパリに住んでいますね。

■イタリアに2年。パリは半年です。

□ベラルーシでは、またアレクシエービッチさんには発言の機会が与えられないのでしょうか。

■私の「チェルノブイリの祈り」は、すでに17カ国で翻訳されています。ベラルーシではまだ出版されていません。ルカシエンコ大統領はまだこれが有害な本であると言っています。全体主義体制に戻っている。民主的な考え方をする人々が消されてしまっています。

□ルカシエンコ大統領を横に置いて、今のベラルーシをどう思いますか。